

## 山陰沖日本海における頭足類相

和田年史<sup>1</sup>・増田 修<sup>2</sup>

### Cephalopod fauna off southwestern Sea of Japan along San'in district, Japan

Toshifumi WADA<sup>1</sup> and Osamu MASUDA<sup>2</sup>

**要旨:** 日本海南西部に位置する島根県・鳥取県・兵庫県の沖合から 1980～2012 年の間に採集された 700 点以上の標本に基づき、山陰沖日本海における頭足類（イカ・タコ類）の出現リストを作成した。本研究の結果、18 科 53 種の頭足類が記録された。それらのすべてについて、標本写真とともに、採集地・採集方法（漁法）・個体数・雌雄・採集日・標本管理者のデータを記した。また、種によっては生時の写真も合わせて記録した。山陰沖日本海では対馬暖流の影響が強く、沿岸域では多くの暖海性種が記録されるとともに、沖合の水深 200 m よりも深い海域からは寒海性種とともに中層・深海性種が確認された。本研究で得られた 53 種のうちの 15 種（全体の 28.3 %）は、今回初めて山陰沖での生息分布が確認された種であった。また、日本海における初記録となるヤツデイカとトウガタイカや、未記載種と考えられるサメハダホウズキイカ科の 1 種も山陰沖から確認された。

**キーワード:** 生物地理、頭足類、コウイカ、動物相、タコ、山陰沖日本海、ツツイカ

**Abstract:** Cephalopods collected by mainly a set net at 35 m depth and several bottom trawls at 100-300 m depth off San'in district in the southern part of the Sea of Japan during 1980-2012 were examined. More than 700 specimens were available, a total of 53 species from 18 families were identified. The registered number, photograph, catch date and locality (including depth in some cases) were given for all specimens, along with a brief note on previous records and systematic remarks for each species. The cephalopods of off San'in district were composed of many warm-water species in the coastal waters which were affected by Tsushima Warm Current. On the other hand, some cold-water squids and octopuses were found from the middle and deep seas below 200 m depth. Fifteen species (28.3 % of the total) were new records from this area, and 2 species among them were first records from Sea of Japan. Cranchiidae sp. and *Octopus* spp. of them has been previously unknown or poorly understood.

**Keywords:** biogeography, cephalopod, cuttlefish, fauna list, octopus, Sea of Japan off San'in district, squid

### はじめに

日本近海に生息する頭足類（軟体動物門；頭足綱）は、既存の文献（Sasaki 1929；奥谷ほか 1987；窪寺 2000；Kubodera and Lu 2002；奥谷 2005）によると、合計 150 種を超える。我が国の頭足類相の調査はこれまでに島根県敬川沖（窪寺 1986）、北海道襟裳岬東方沖（窪寺 1993）、三陸・常磐沖（Kubodera 1996）、駿河湾（Kubodera 1997）、東シナ海（Kubodera and Yamada 1997）、瀬戸内海（Kubodera 2000）、土佐湾（Kubodera 2001）、三浦半島沿岸域（Kubodera and

Yamada 2001）、南西諸島（Kubodera and Horikawa 2005）、北海道南部臼尻周辺（佐藤・宗原 2010）などで行われているが、太平洋側と比べて日本海側の情報が極めて乏しいのが現状である。窪寺（1986）は日本海側の島根県沖から 6 科 18 種の頭足類を記録し、さらに Nishimura（1968）や本間ら（1983）の報告を含めて、日本海には 50 数種類の頭足類が生息していることを報告している。その後も日本海側における頭足類の断片的な採集記録や報告（例えば、宇野・宇野 1994；宇野 1997；窪寺 2001；櫻井・河野 2010）

<sup>1</sup> 鳥取県立博物館附属山陰海岸学習館 〒681-0001 鳥取県岩美郡岩美町牧谷 1794-4  
Coastal Branch of Tottori Prefectural Museum, Makidani 1794-4, Iwami-cho, Tottori, 681-0001 Japan  
E-mail: wadat@pref.tottori.jp

<sup>2</sup> 姫路市立水族館 〒670-0971 兵庫県姫路市西延末 440  
Himeji City Aquarium, Nishinobusue 440, Himeji, Hyogo, 670-0971 Japan  
E-mail: osamu\_masuda@city.himeji.hyogo.jp

[受領 Received 30 November 2012 / 受理 Accepted 15 January 2013]

はあるものの、日本海側の海域で長期にわたって継続的に調査された例はほとんどなく、頭足類相の構成を考察するまでには至っていない。

日本海の動物相は、基本的に南から日本列島に沿って流れる対馬暖流の影響を受けて多くの暖海性種が分布するとともに、沖合の水深 200 m 以深の中層・深海域では寒海性種が確認される（沖山 1967；西村 1974；長沼 2000）。日本海南西部に位置する山陰沖は対馬暖流の影響が強く、頭足類と同じ軟体動物に属する有殻翼足類の生息分布や魚類相を見ても、水深 100～150 m 程度までの浅海域では、初夏から晩秋にかけて様々な暖海性種が生息する。スルメイカやケンサキイカなどの水産有用種においては、比較的海水温の高い日本海南西部は主要な繁殖地としても知られている（笠原 1972；河野 2007b）。一方、水深 200 m よりも深い海域（漸深海）は、日本海固有水と呼ばれる均質な低温海水で満たされており、そこでは北海道周辺海域などの冷水域に分布する亜寒帯性種が生息する。日本海固有水域の生物学的な特徴としては、真の深海性種が少なく、北方系種が低温水の深場へ進入しているほかは、固有種が少ないことが挙げられる（沖山 1967；西村 1974）。

今回、日本海に面する山陰海岸（島根県・鳥取県・兵庫県）ならびにその沖合において、沖合底曳網（トロール網漁）、ホタルイカ底曳網（海底付近でのトロール網漁）、大型定置網（大敷網）、イカ釣り、ソデイカの樽流し漁、コウイカ類の籠網によって漁獲あるいは混獲されたものを中心に、潜水、磯採集、打ち上げ等による直接採集を含めて、生息する頭足類を収集し、それらの標本をもとに山陰沖日本海の頭足類リストを作成した（表 1）。その結果、18 科 53 種の頭足類が確認され、種まで同定された 50 種のうち 14 種（28%）は既知の文献（窪寺 1986；奥谷ほか 1987；土屋 2000；奥谷 2005）において、山陰沖日本海での生息分布が確認されていない種であった。さらに、ヤツデイカとトウガタイカについては日本海において初めての記録となる。今回の調査で得られた標本および採集データ（採集地・個体数・雌雄・採集年月日・採集方法・標本登録番号（管理者））を付表に示した。付表の通り、多くの標本が兵庫県新温泉町浜坂沖での沖合底曳網および釜屋沖定置網によって採集されたものであり、そのほとんどが宇野明氏と宇野政美氏によって提供されたものである。

得られた種の記載と標本データにおいては、基本的に窪寺（2000）および奥谷（2005）に従って配列した。「種の記載」の中で、各種名につけてある番号は付表

中の番号と一致させた。種の記載については、既知の図鑑や論文等を参考に記し、山陰沖日本海での調査で得られた知見を追記する形とした。本研究で用いた標本は、一部を除いて姫路市立水族館（HCA-Mo）および鳥取県立博物館（TRPM-AMo）にて 10% 中性ホルムアルデヒド溶液によって固定し、一部はエタノール置換した後に収蔵庫で保管されている。なお、標本登録されていない一部の貝殻などの標本や写真データについては、所有者（管理者）を図中に記録した。

本研究では採集記録から生息リストを作成しただけでなく、採集個体をホルマリン固定し登録標本として水族館および博物館施設で所蔵していることから、今後の調査研究においてリファレンス・コレクション等として有効活用していただけるであろう。

## 種の記載

### I. コウイカ科 SEPIIDAE

#### 1. カミナリイカ *Sepia (Acanthosepion) lycidas* Gray, 1849 (図 1-1a, b, c, d)

日本に生息するコウイカの仲間、コブシメやトラフコウイカと並んで大型になる種。外套長は雌より雄の方が大きくなり、最大 38 cm に達する。外套背面にキスマークのような眼状斑が並ぶのが本種の特徴（英名は Kisslip cuttlefish）。外套膜内部の背側に沿って石灰質の甲（cuttlebone）を有する（コウイカ科の特徴）。触腕掌部の吸盤は小型で等大のものが 8 列並び、合計 200 個以上を数える。雄の左第 IV 腕は腕の中央付近の吸盤が縮小して交接腕化する。甲は長卵形で、先端の棘は鋭く尖り、甲の後方では内円錐と外円錐の癒着部分が丸みを帯びて張り出す。筋肉は厚く柔らかく美味。

分布 — 本州中部以南、東・南シナ海域。山陰海岸を含む日本海沿岸にも広く分布する（山陰沖では初記録）。水深 5～100 m の砂泥底に生息し、イカ籠や大型定置網で混獲される。山陰沖の浅海域では春先から夏季に産卵が確認され、秋には外套長が 5 cm 程度の稚イカが砂浜海岸の浅場で観察される。

#### 2. コウイカ *Sepia (Platysepia) esculenta* Hoyle, 1885 (図 1-2a, b, c, d)

日本で最も普通にみられる代表的なコウイカ。外套長は雌より雄の方が大きくなり、最大 20 cm を超える。外套背側の縞模様は成熟した雄で顕著にみられるが、雌では不明瞭。触腕掌部の吸盤は等大のものが 10～16 列並び、合計 200 個以上を数える。雄の左第 IV 腕

表 1. 山陰沖日本海の頭足類リスト

---

軟体動物門 MOLLUSCA
頭足綱 Class CEPHALOPODA
鞘形亜綱 Subclass COLEOIDEA
コウイカ目 Order SEPIIDA
コウイカ科 Family SEPIIDAE (14種)
カミナリイカ <i>Sepia (Acanthosepion) lycidas</i> Gray, 1849
コウイカ <i>Sepia (Platysepia) esculenta</i> Hoyle, 1885
ハリイカ <i>Sepia (Platysepia) madokaii</i> Adam, 1939
ウスベニコウイカ <i>Sepia (Doratosepion) lorigera</i> Wülker, 1910
ヒョウモンコウイカ <i>Sepia (Doratosepion) pardex</i> Sasaki, 1913
テナガコウイカ <i>Sepia (Doratosepion) longipes</i> Sasaki, 1913
ウデボソコウイカ <i>Sepia (Doratosepion) tenuipes</i> Sasaki, 1929
シシイカ <i>Sepia (Doratosepion) peterseni</i> Appellöf, 1886
ヒメコウイカ <i>Sepia (Doratosepion) kubiensis</i> Hoyle, 1885
エゾハリイカ <i>Sepia (Doratosepion) andreana</i> Steenstrup, 1875
スジコウイカ <i>Sepia (Doratosepion) tokioensis</i> Ortmann, 1888
ミサキコウイカ <i>Sepia (Doratosepion) misakiensis</i> Wülker, 1910
ハナイカ <i>Metasepia tullbergi</i> Appellöf, 1886
シリヤケイカ <i>Sepiella japonica</i> Sasaki, 1929
ミミイカダマシ科 Family SEPIADARIIDAE (1種)
ミミイカダマシ <i>Sepiadarium kochii</i> Steenstrup, 1881
ダンゴイカ科 Family SEPIOLIDAE (3種)
ダンゴイカ <i>Sepiola birostrata</i> Sasaki, 1918
ミミイカ <i>Euprymna morsei</i> (Verrill, 1881)
ボウズイカ <i>Rossia pacifica</i> Berry, 1911
ヒメイカ科 Family IDIOSEPIIDAE (1種)
ヒメイカ <i>Idiosepius paradoxus</i> (Ortmann, 1881)
ツツイカ目 Order TEUTHIDA
閉眼亜目 Suborder MYOPSIDA
ヤリイカ科 Family LOLIGINIDAE (5種)
アオリイカ <i>Sepioteuthis lessoniana</i> Lesson, 1832
ヤリイカ <i>Loligo (Heterololigo) bleekeri</i> keferstein, 1866
ケンサキイカ <i>Loligo (Photololigo) edulis</i> Hoyle, 1885
ジンドウイカ <i>Loliolus (Nipponololigo) japonica</i> (Hoyle, 1885)
ウイジンドウイカ <i>Loliolus (Nipponololigo) uyii</i> (Wakiya & Ishikawa, 1921)
開眼亜目 Suborder OEGOPSIDA
ホタルイカモドキ科 Family ENOPLOTEUTHIDAE (3種)
ホタルイカモドキ <i>Enoploteuthis chuni</i> Ishikawa, 1914
ホタルイカ <i>Watasenia scintillans</i> (Berry, 1911)
タイワンホタルイカ <i>Abralia multiamata</i> Sasaki, 1929
ヤツデイカ科 Family OCTOPOTEUTHIDAE (1種)
ヤツデイカ <i>Octopoteuthis sicula</i> Rüppell, 1844
ツメイカ科 Family ONYCHOTEUTHIDAE (1種)
カギイカ <i>Onykia loennbergi</i> (Ishikawa & Wakiya, 1914)
ダイオウイカ科 Family ARCHITEUTHIDAE (1種)
ダイオウイカ <i>Architeuthis dux</i> Steenstrup, 1857
アカイカ科 Family OMMASTREPHIDAE (5種)
スルメイカ <i>Todarodes pacificus</i> Steenstrup, 1880
アブライカ <i>Nototodarus hawaiiensis</i> (Berry, 1912)
アカイカ <i>Ommastrephes bartrami</i> (Lesueur, 1821)
スジイカ <i>Eucleoteuthis luminosa</i> (Sasaki, 1915)
トビイカ <i>Sthenoteuthis oualaniensis</i> (Lesson, 1830)
ソデイカ科 Family THYSANOTEUTHIDAE (1種)
ソデイカ <i>Thysanoteuthis rhombus</i> Troschel, 1857
ユウレイイカ科 Family CHIROTEUTHIDAE (1種)
ユウレイイカ <i>Chiroteuthis picteti</i> Joubin, 1894
サメハダホウズキイカ科 Family CRANCHIIDAE (4種)
サメハダホウズキイカ <i>Cranchia scabra</i> Leach, 1817
ホウズキイカ <i>Liocranchia reinhardti</i> (Steenstrup, 1856)
トウガタイカ <i>Leachia pacifica</i> (Issel, 1908)
サメハダホウズキイカ科の1種 <i>Cranchiidae</i> sp.
八腕形目 Order OCTOPODA
マダコ科 Family OCTOPODIDAE (7種)
マダコ <i>Octopus vulgaris</i> Cuvier, 1797
イイダコ <i>Octopus ocellatus</i> Gray, 1849
ミズダコ <i>Octopus dofleini</i> (Wülker, 1910)
マダコ属の1種 <i>Octopus</i> sp.
クモダコ <i>Octopus (Paroctopus) longispadiceus</i> (Sasaki, 1917)
マダコ属の1種 <i>Octopus (Paroctopus)</i> sp.
ヒョウモンダコ <i>Hapalochlaena fasciata</i> (Hoyle, 1886)
ムラサキダコ科 Family TREMOCTOPODIDAE (1種)
ムラサキダコ <i>Tremoctopus violaceus gracialis</i> (Eydoux & Souleyet, 1852)
アミダコ科 Family OCYTHOIDAE (1種)
アミダコ <i>Ocythoe tuberculata</i> Rafinesque, 1814
カイダコ科 Family ARGONAUTIDAE (2種)
タコブネ <i>Argonauta hians</i> (Lightfoot, 1786)
アオイガイ <i>Argonauta argo</i> Linnaeus, 1758
カンテンダコ科 Family ALLOPOSIDAE (1種)
カンテンダコ <i>Haliphron atlanticus</i> Steenstrup, 1852

---

が交接腕で、腕の中央付近（基部から6列目以降）の吸盤が縮小する。甲は長卵形で、カミナリイカに比べて薄く、背面には顆粒が並ぶ。甲の先端の棘は鋭く尖り、甲の後端部で内円錐が外円錐と癒着して棚状に張り出す。筋肉は柔らかく美味。

分布 — 北海道を除く日本各地の沿岸域、東・南シナ海域。山陰海岸を含む日本海沿岸にも広く分布する。水深5～100 mの砂泥底に生息する。山陰沖の浅海域では春先から初夏にかけて産卵が確認され、産卵巣となる柴を入れた籠網を海底に沈めて漁獲するイカ籠漁が5～6月に行われている。

### 3. ハリイカ *Sepia (Platysepia) madokaii* Adam, 1939

(図 1-3a, b, c)

外套背側はむらのある暗褐色で、明瞭な模様がなく、コウイカの幼若体と間違えられることもある小型種（外套長は8 cm前後）。触腕以外の腕は太くて短く、各腕の長さがほぼ等しい。触腕掌部の吸盤は小さく等大のものが8列並び、合計220個前後を数える。雄の左第IV腕が交接腕で、腕の中央付近の吸盤が縮小する。甲は長卵形で比較的背腹に薄く、背面は淡い紅色を呈する。甲の先端の棘はコウイカよりも鋭く尖る。

コウイカやカミナリイカの甲とは異なり、甲の後方において内円錐と外円錐の癒着部分が張り出さない。

分布 — 東京湾以南、東シナ海域。山陰海岸以南の日本海沿岸にも分布する（山陰沖では初記録）。山陰沖の浅海域では稀に定置網でも混獲されるが、水深100 m前後の海底から採集されることが多い。

### 4. ウスベニコウイカ *Sepia (Doratosepion) lorigera* wülker, 1910

(図 1-4a, b, c, d, e)

外套長は25 cmに達する。外套背側は赤褐色で、背中線に沿って中央付近の色が濃くなる。腹面両側に細い褐色の縦線があり、その後端は内側に曲がって終わる。触腕掌部の吸盤は60～80個の吸盤のうち、中央部の4個が特に大きく、その周りの5～6個はやや小さい。雄の第I腕は外套長の1.5倍以上に伸長し、先端方向へ細まって糸状となるが、先端付近では柳葉状の薄い保護膜を有する。雄の第I腕先端部の中央には肉柱が走り、左右交互に枝脈が伸び1列の格子目を形成する。甲は細長い *Doratosepion* 型で、その幅は雄で長さの18%、雌で20%程度。甲の背面は淡い桃褐色で、先端の棘は尖る。外円錐は後端部で杯状に広がる。

分布 — 東京湾以南、東シナ海域。山陰海岸以南の

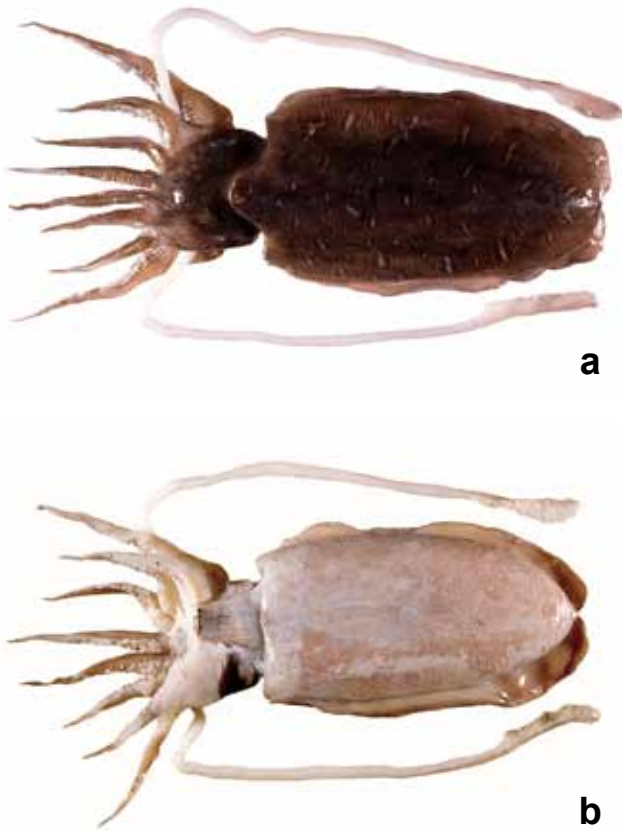


図 1-1. コウイカ科カミナリイカ. a: 背側 (HCA-Mo-845). b: 腹側 (HCA-Mo-415). c: 甲の背側 (HCA-Mo-845). d: 生時 (採集地: 鳥取県鳥取市鳥取砂丘沖).

日本海沿岸にも分布し（山陰沖では初記録）、山陰沖では水深 180 ~ 300 m の海底から底曳網によって混獲される。

5. ヒョウモンコウイカ *Sepia (Doratosepion) pardex*

Sasaki, 1913

(図 1-5a, b, c)

外套長は 20 cm を越える。外套背側は赤褐色で、輪郭と中程が白い楕円形の斑点がある。腹面両側には鰭に沿って細い赤褐色の縦線がある。第 I 腕から第 III 腕の反口側には赤色縦帯があり、死後は褐色となる。触腕掌部の吸盤は小さく等大で 8 ~ 10 列並び、合計 300 個前後を数える。甲は細長い *Doratosepion* 型で、その幅は長さの 15 ~ 18 % 程度。甲の背面は淡い紅色で、先端の棘は尖り、内円錐は比較的平らで後端方向に細まり、外円錐は後端部で杯状に広がる。

分布 — 東京湾以南、東シナ海域。山陰海岸以南の日本海沿岸にも分布し、主に水深 200 m 前後の底曳網で混獲されるが、沿岸の定置網や水深 100 m 前後からも採集される。

6. テナガコウイカ *Sepia (Doratosepion) longipes*

Sasaki, 1913

(図 1-6a, b, c)

外套長は 20 cm に達する。他種と比べて、外套背側の前端部が突出し、眼域末端に達する。外套背側は紫褐色で、中程が濃く、赤斑が散らばる。外套膜腹側の縁部には基底にそって赤褐色帯がある（死後は茶褐色となる）。雄の第 I 腕は鞭状に伸長し、伸長部分の吸盤は 2 列になるが、ウスベニコウイカのように葉状に広がらない。第 II 腕も第 I 腕ほどではないが、やや伸長する。触腕掌部の吸盤は 70 ~ 80 個の吸盤のうち、中央部の 4 個が特大で、その他は等大の小吸盤が並ぶ。第 I 腕から第 III 腕の反口側には赤い条線が走る（死後は黒褐色となる）。甲は細長い *Doratosepion* 型で、背稜が明瞭である。

分布 — 東京湾以南、東シナ海域。山陰海岸以南の日本海沿岸にも分布するが、個体数は少ない。山陰沖では水深 150 ~ 270 m の海底から底曳網によって混獲される。



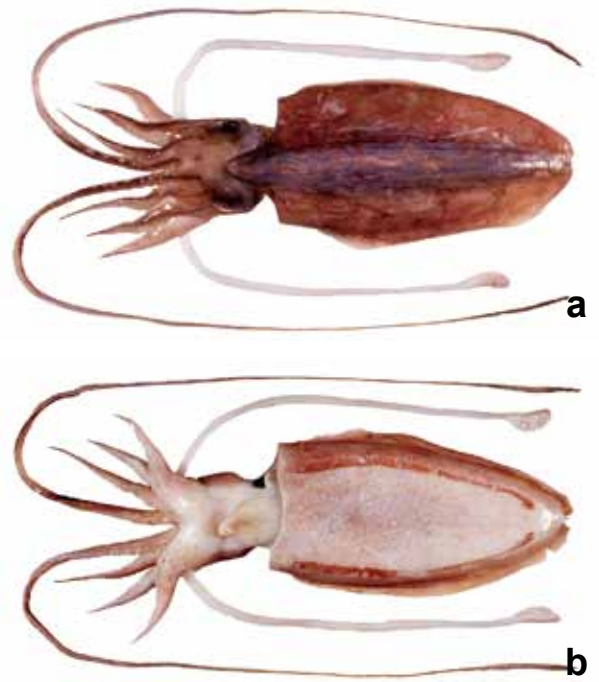
図 1-2. コウイカ科コウイカ. a: 背側 (TRPM-AMo-0000559). b: 腹側 (TRPM-AMo-0000559). c: 甲の背側 (HCA-Mo-844). d: コウイカのペア (鳥取県岩美町羽尾, 撮影: 今野仁志).

7. ウデボソコウイカ *Sepia (Doratosepion) tenuipes*

Sasaki, 1929

(図 1-7)

外套長は 10 cm 程度の小型種。外套背面は赤褐色で、腹面は淡褐色。第 II・III 腕の先端は急に細まり、そこから吸盤が 2 列になる。雄では第 I 腕が伸長し、外套長の 1.3 倍を超える。触腕掌部は等大の吸盤が 8 列で約 130 個並び、ウスベニコウイカやテナガコウイカのような巨大な吸盤はない。甲は細長い *Doratosepion* 型で、その幅は長さの 22% 前後で、比較的背腹に薄い。



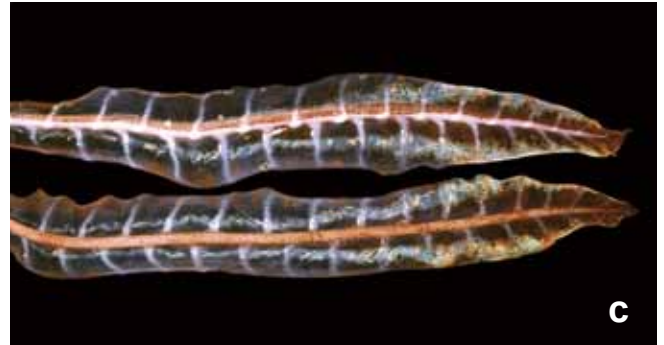
a



b



c



c



d



e

図 1-3. コウイカ科ハリイカ. a: 背側 (HCA-Mo-471).  
b: 甲の背側. c: 甲の腹側.

図 1-4. コウイカ科ウスベニコウイカ. a: 背側 (HCA-Mo-808). b: 腹側 (HCA-Mo-808). c: 雄の第 I 腕先端部分. d: 甲の背側 (上が♂ HCA-Mo-818, 下が♀ HCA-Mo-820). e: 甲の腹側.

分布 — 東京湾以南の南日本の海域。山陰海岸以南の日本海沿岸にも分布するが（山陰沖では初記録）、個体数は多くない。沿岸の定置網や沖合底曳網で混獲される。

8. シシイカ *Sepia (Doratosepion) peterseni* Appellöf, 1886  
(図 1-8a, b, c, d)

外套長は雌より雄の方が大きくなり、雄では 15 cm 程度に達する。外套背面は暗褐色で斑紋はない。雄の第 II 腕は著しく伸長し、最長では外套長の 7 倍近くに達する。生時は長い第 II 腕がコイル状に巻かれた

状態で、コンパクトに収納されている。第 I 腕も第 II 腕ほどではないが、伸長する。触腕掌部の吸盤は 90 ~ 110 個の吸盤が 8 列で並び、中央の数個がやや大きい。甲は細長い *Doratosepion* 型で、その幅は長さの 1/6 程度。最大幅は前方の 1/4 あたりにあり、本海域に分布する *Doratosepion* 亜属の種では最も細長い。

分布 — 本州中部以南の南日本の海域で、山陰海岸以南の日本海沿岸にも分布する。山陰沖では水深 100 ~ 300 m の海底付近から底曳網によって採集されるが、稀に浅海域の定置網でも混獲される。

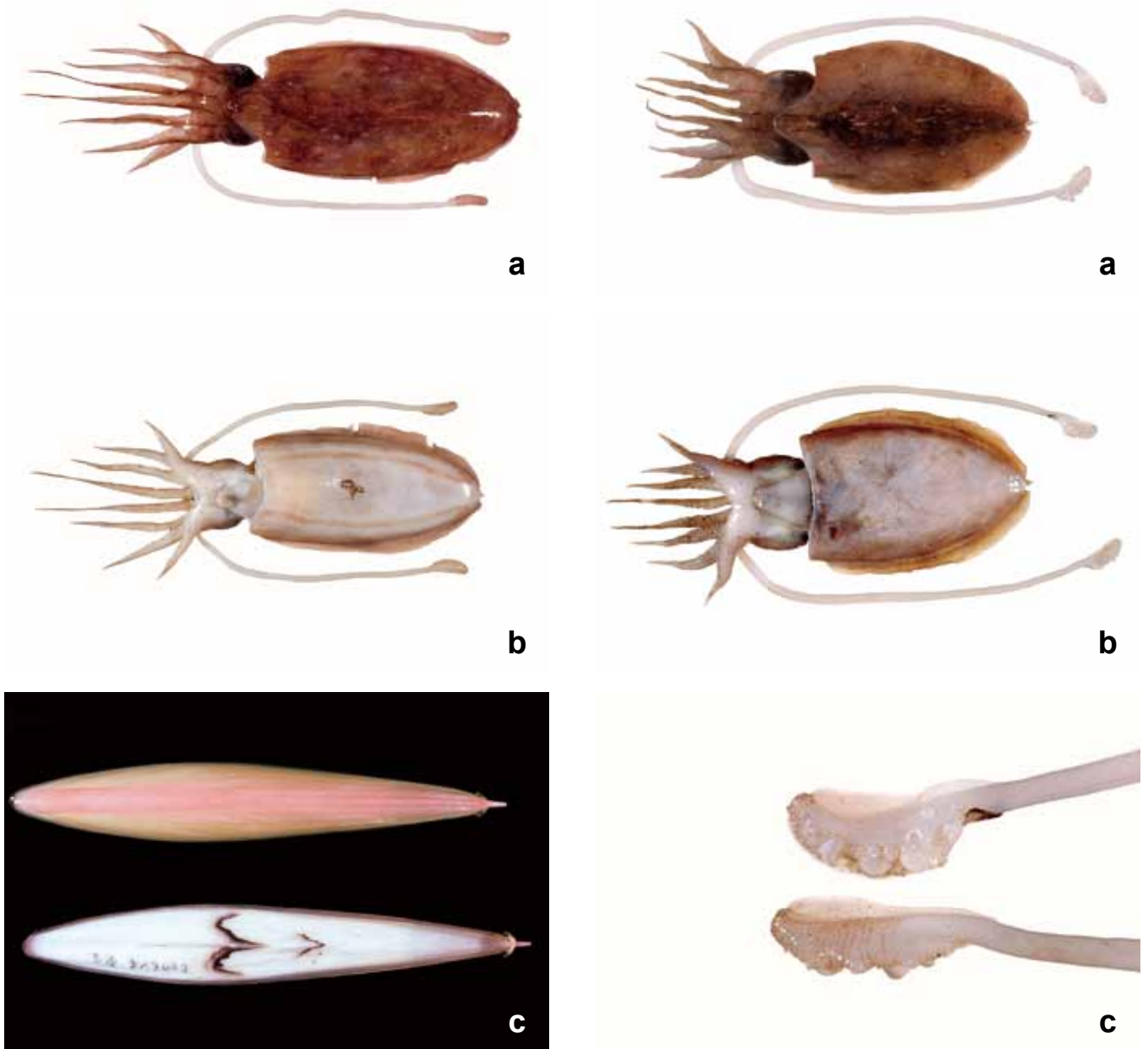


図 1-5. コウイカ科ヒョウモンコウイカ. a: 背側 (HCA-Mo-805). b: 腹側 (HCA-Mo-805). c: 甲の背側 (上) および腹側 (下) (HCA-Mo-852).

図 1-6. コウイカ科テナガコウイカ. a: 背側 (HCA-Mo-771). b: 腹側 (HCA-Mo-771). c: 触腕掌部 (HCA-Mo-771).

9. ヒメコウイカ *Sepia (Doratosepion) kobeensis* Hoyle, 1885

(図 1-9a, b, c, d)

外套長は 7 cm ほどの小型種。体形は細く、外套背側には斑紋がなく、中央がやや濃い灰褐色。触腕以外の腕はほぼ同長で、特徴に乏しい。触腕の吸盤は 60～80 個が 8 列に並び、2～3 列目の数個だけが他よりいくらか大きい。甲は細長い *Doratosepion* 型で、内円錐は V 字状に立ち上って、甲の半分程の長さには達し、外円錐の後端は小さな杯状となる。甲の棘は鋭く長く、腹側に微弱な敵がある。本種にはいくつかの型があり (Sasaki 1929), 他の *Doratosepion* 亜属の雌と混同される場合も多く、分類学的な再検討が必要とされる種である。

分布 — 本州南部以南, 東シナ海域。山陰海岸以南の日本海沿岸にも分布する。山陰沖では定置網や底曳網によって混獲されることが多い。

10. エゾハリイカ *Sepia (Doratosepion) andreana*

Steenstrup, 1875

(図 1-10a, b, c)

外套長は 12 cm に達し、外套背面は暗褐色。鰭は外套膜前縁のわずかに後部から始まる。雄の第 II 腕が伸長し、先端半分は吸盤が 2 列になり、鈍端で終わる。触腕掌部は吸盤が 8 列で、中央の 4～5 個は周辺の吸盤の約 2 倍の大きさとなる。甲は細長い *Doratosepion* 型で、長さは幅の約 6 倍。

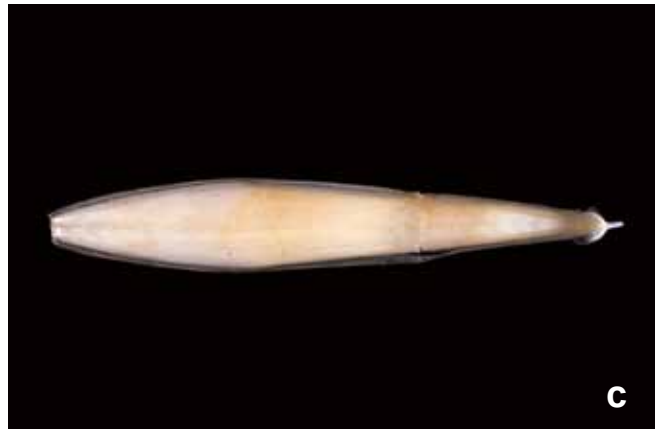
分布 — 北海道南部以南の日本各地の沿岸域, 東シナ海域。山陰海岸を含む日本海沿岸にも広く分布する。水深 50～300 m の砂泥底に生息し、山陰沖では水深 100～300 m の海底から底曳網によって採集されるが、稀に浅海域の定置網でも混獲される。



a



b



c



d



図 1-7. コウイカ科ウデボソコウイカ. 背側 (HCA-Mo-772).

図 1-8. コウイカ科シシイカ. a: 背側 (HCA-Mo-743). b: 腹側 (HCA-Mo-743). c: 甲の腹側 (HCA-Mo-816). d: 生時 (♂) (TRPM-AMo-0000564, 撮影: 徳田悠希).



11. スジコウイカ *Sepia (Doratosepion) tokioensis*

Ortmann, 1888

(図 1-11a, b, c, d)

外套長は雄で 8 cm 前後, 雌で 6 cm 前後の小型種。外套膜は卵楕円形で, 雄の外套幅は外套長の 45 % 程度。外套背側は紫褐色で赤斑がある。雄では鰭の後端が膨れて張り出し, 外套腹面には鰭に沿って 2 本の赤褐色の縦線がある。触腕の吸盤は不等大で, 中央の 4 ~ 5 個が大きく, その数は 55 ~ 60 個を数える。甲は細長い *Doratosepion* 型で, 長さは幅の約 4 倍。



a



b



a



c



b



d



c

図 1-9. コウイカ科ヒメコウイカ. a: 背側 (HCA-Mo-766). b: 腹側 (HCA-Mo-766). c: 甲の背側 (上が HCA-Mo-846, 下が HCA-Mo-843). d: 甲の腹側.

図 1-10. コウイカ科エゾハリイカ. a: 背側 (HCA-Mo-773). b: 雄の第 II 腕の先端部 (HCA-Mo-842). c: 甲の背側 (上) および腹側 (下) (HCA-Mo-842).



a



b



c



d

図 1-11. コウイカ科スジコウイカ. a: 背側 (HCA-Mo-757). b: 腹側 (HCA-Mo-757). c: 触腕掌部 (HCA-Mo-757). d: 求愛行動中 (左が♂, 右が♀) (TRPM-AMo-0000575).

分布 — 本州中部以南の南日本の海域。山陰海岸以南の日本海沿岸にも分布する。山陰沖の浅海域においては多くが定置網で混獲される。

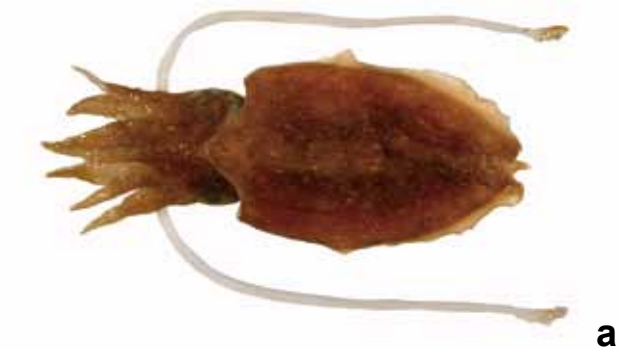
12. ミサキコウイカ *Sepia (Doratosepion) misakiensis*

Wülker, 1910

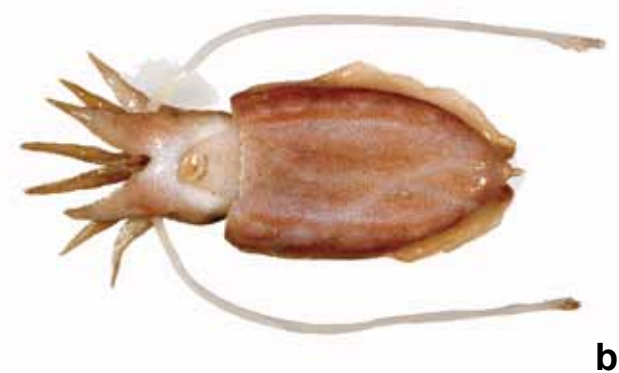
(図 1-12a, b)

外套長は 7 cm ほどの小型種。スジコウイカに類似するが、外套幅は狭く、外套長の 30% 以下。雄の鰭の後端の耳状部は左右でつながっており、スジコウイカのように背面から棘が確認できない。雄の外套腹面には鰭に沿って 2 本の赤褐色の縦線がある。触腕の吸盤は不等大で、中央の 4~5 個が大きく、その数は 55~60 個を数える。甲は細長い *Doratosepion* 型。

分布 — 本州中部以南の南日本の海域。山陰海岸以南の日本海沿岸にも分布する。山陰沖の浅海域においては定置網で混獲される。



a



b

図 1-12. コウイカ科ミサキコウイカ. a: 背側 (HCA-Mo-575). b: 腹側 (HCA-Mo-575).

13. ハナイカ *Metasepia tullbergi* Appellöf, 1886

(図 1-13a, b, c, d)

外套長は雄で 4 cm 前後、雌で 6 cm ほどの小型種。外套膜は半円形で、外套幅は外套長の 60% に達する。生時には、外套背面と腕に黄色や赤色の斑紋が生じ、死後の地味な色彩とは大きく異なる。外套背面には大小の肉質突起がいくつも出現する(生時のみ)。外套腹面は紫褐色。触腕掌部には 50 個ほどの吸盤が 6 列に並ぶ。甲は菱形で外円錐を欠き、他種のものと同様に異なる。

分布 — 本州中部以南、東シナ海域およびインドネシアの沿岸域。山陰海岸以南の日本海沿岸にも分布する。山陰沖の浅海域において主に定置網で混獲される。

14. シリヤケイカ *Sepiella japonica* Sasaki, 1929

(図 1-14a, b, c, d)

外套長は 20 cm に達する。雌よりも雄の方がやや大きくなる。外套膜は卵円形でコウイカよりも細長く、背腹に膨れる。外套膜背面は白点斑がみられ、腹面は蒼白色である。外套膜後端の尾腺から出る分泌液によって後端部が茶褐色に染まる場合がある。触腕は比較的長く、掌部には 20 列の小吸盤が並ぶ。雄の左第 IV 腕が交接腕で、基部寄りの 10 列ほどの吸盤が縮小する。甲は長卵形で、後端に棘がないことが本種の最大の特徴。外円錐は後端部で広く張り出す。肉質はコウイカよりやや劣るが、天日干しのスルメが美味。

分布 — 東北地方南部以南、東シナ海域。山陰海岸を含む日本海沿岸にも広く分布する(山陰沖では初記録)。山陰海岸の浅海域では、春先から初夏にかけて本種の黒い卵嚢が確認される。年によって変動はあるが、定置網による漁獲が多い。

## II. ミミイカダマシ科 SEPIADARIIDAE

15. ミミイカダマシ *Sepiadarium kochii* Steenstrup, 1881

(図 2)

外套長は 2 cm 程度の小型種で、甲や軟甲 (gladius) を欠く。外套膜は短く、丸いドーム形。前背縁は外套幅の 1/4 の長さで頭部と癒着している。鰭は丸い。外套膜と漏斗は靱帯で癒着している。各腕の吸盤は基部寄りでは 2 列だが、先端から 20 列ぐらいは 4 列である。触腕は細く長く、掌部には等大の微小吸盤が 8 列で並ぶ。触腕掌部の吸盤角質環には明瞭な歯が見られないが、微弱な凹凸がある。外套膜背側には橙色小斑が散らばり、死後も明瞭に確認できる。

分布 — 日本海中部以南、インド・太平洋に広く分布する。山陰沖にも分布するが、本調査ではこれまで



a



b



c

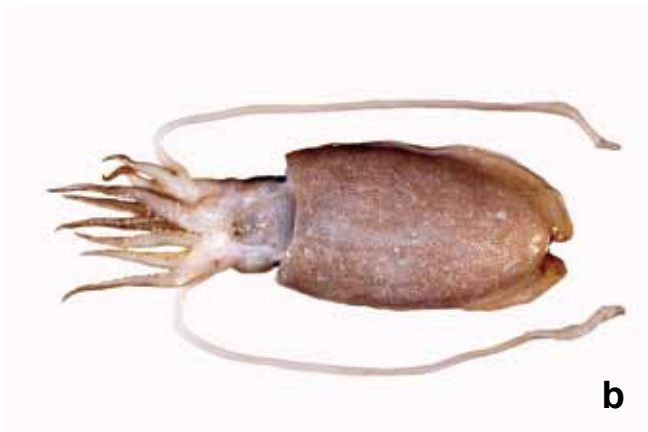


d

図 1-13. コウイカ科ハナイカ. a: 背側 (HCA-Mo-882). b: 腹側 (HCA-Mo-882). c: 甲の腹側 (HCA-Mo-882). d: 生時 (HCA-Mo-882).



a



b



c



d

図 1-14. コウイカ科シリヤケイカ. a: 背側 (HCA-Mo-518). b: 腹側 (HCA-Mo-518). c: 甲の背側 (HCA-Mo-847). d: 生時 (TRPM-AMo-0000610).

に沖合底曳網漁によって 1 個体のみが得られているに過ぎない。生息個体数は少なくないと思われるが、小型種であるため底曳網に掛かりにくいものと考えられる。

### Ⅲ. ダンゴイカ科 SEPIOLIDAE

#### 16. ダンゴイカ *Sepiola birostrata* Sasaki, 1918

(図 3-1)

外套長が 2 cm 程度の小型種で、甲や軟甲を欠く。外套膜はドーム型で、その幅は長さの約 50%。前背縁は頭部と癒着している。鰭は丸く、後端よりやや前方に位置する。各腕の吸盤は 2 列で、雄の左第 1 腕が交接腕となる。交接腕の基部には 4 個の正常吸盤があり、そこにある肉瘤上に通常 2 本（稀に 1 または 3 本）の円錐状突起が生じる。そこから先端の方の吸盤柄は肉質隆起となる。触腕掌部には 200 ~ 300 個の吸盤が 8 ~ 10 列で並ぶ。

分布 — 東北地方以南、東シナ海域。山陰海岸を含



図 2. ミミイカダマシ科ミミイカダマシ. 背側 (HCA-Mo-446).



図 3-1. ダンゴイカ科ダンゴイカ. 背側 (TRPM-AMo-0000612).

む日本海沿岸にも広く分布する。山陰海岸の浅海域では、水深 10 m 以浅の砂浜海岸で採集される。

17. ミミイカ *Euprymna morsei* (Verrill, 1881)

(図 3-2a, b)

外套長が 4 cm 程度の小型種で、甲や軟甲を欠く。外套膜は丸みのある袋状で、前背縁は頭部と癒着している。頭部は外套膜に比して大きく、眼も大きい。外套背面は暗紫褐色で、腹面は灰白色を呈する。鰭は丸く、後端よりやや前方に位置する。各腕の吸盤は 4 列で、雄の左第 I 腕が交接腕となる。交接腕の先端寄りの 1/2 は吸盤が肉質の乳頭状突起となる。墨汁囊上に 1 対の発光器を有する。

分布 — 北海道以南の日本各地、東・南シナ海域。山陰海岸を含む日本海沿岸にも広く分布する。山陰沖の浅海域において主に定置網で混獲される。

18. ボウズイカ *Rossia pacifica* Berry, 1911

(図 3-3a, b)

ダンゴイカの仲間では大型種で、外套長が 8 cm に達する。外套膜は丸みのある袋状で、鰭は丸く、後端

よりやや前方に位置する。ミミイカやダンゴイカとは異なり、前背縁は頭部と癒着しない。さらに、短い匙型の軟甲を有する点でも他のダンゴイカ類と異なる。各腕の吸盤は 2 列で、中央付近で吸盤の密度が高くなる。雄の第 I 腕は左右ともに交接腕となる。触腕掌部の吸盤は 8 列並ぶ。

分布 — 房総半島以北の日本各地、ベーリング海・カリフォルニア沿岸域に分布する。山陰海岸を含む日本海沿岸にも広く分布する（山陰沖では初記録）。水深 100 ~ 600 m までの海底に生息し、山陰沖では水深 200 ~ 300 m の海底から底曳網によって混獲される。水揚げ量は少ないながら市場に出る。

IV. ヒメイカ科 IDIOSEPIIDAE

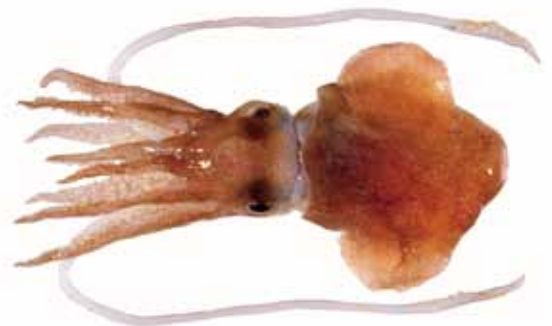
19. ヒメイカ *Idiosepius paradoxus* (Ortmann, 1881)

(図 4a, b)

日本に生息するイカで最も小型の種類。外套長は雄より雌の方が大きく、最大 2 cm 程度となる（雄では 1.5 cm 程度）。外套膜は紡錘型で、後端がやや尖り、外套幅は長さの約 50%。鰭は小さく、後端よりやや手前にある。外套膜背側には小判型の粘着細胞群があり、



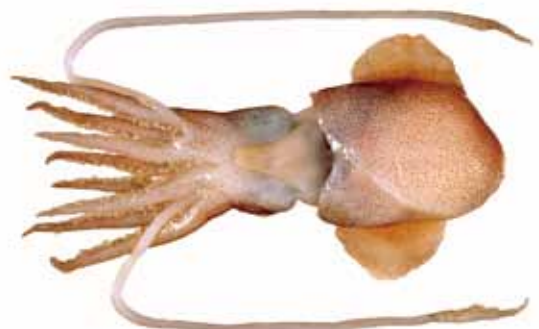
a



a



b



b

図 3-2. ダンゴイカ科ミミイカ. a: 背側 (HCA-Mo-758).  
b: 生時 (採集地: 兵庫県新温泉町釜屋沖).

図 3-3. ダンゴイカ科ボウズイカ. a: 背側 (HCA-Mo-751).  
b: 腹側 (HCA-Mo-751).

これによってアマモなどの海草や海藻類に付着して生活する。各腕は短く、吸盤は2列で30個程度。雄の左右第IV腕が交接腕となる。交接腕化した右第IV腕には肉襞がみられ、左第IV腕の先端には半月形の膜が生じる。両腕ともに基部から4～7列の正常吸盤が残る。触腕掌部の吸盤は4列。

分布 — 北海道以南の日本各地，東シナ海域。山陰海岸を含む日本海沿岸にも広く分布する（山陰沖では初記録）。山陰沖の浅海域では手網による磯採集で採集されるが、個体数は多くない。

#### V. ヤリイカ科 LOLIGINIDAE

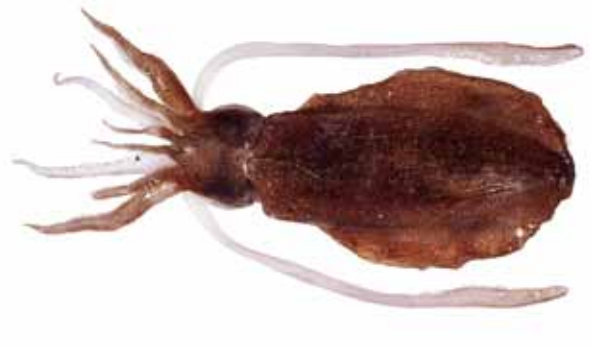
##### 20. アオリイカ *Sepioteuthis lessoniana* Lesson, 1832

(図 5-1a, b, c)

外套長は雌より雄の方が大きくなり、大型個体では40 cm を超える。外套膜は筒状で、外套膜のほぼ全縁に広がる大きな鰭が本種の特徴。石灰質の甲はなく、外套膜背面に沿ってキチン質様の半透明な薄い軟甲を有する（ツツイカ目の特徴）。雄の外套膜背面には断続的な横縞が顕著にみられるが、雌では斑点模様となる。眼球は透明な膜に覆われていて露出しない（閉眼

垂目の特徴)。各腕の吸盤は2列で、角質環には20本前後の三角形の歯がある。雄の左第IV腕が交接腕で、先端から約25%程度の吸盤が消失し、円錐形の肉質突起が2列で並ぶ。触腕掌部の吸盤は2列で30個程度が並び、各吸盤には14～23個の鋭歯がある。肉質は柔らかく美味。

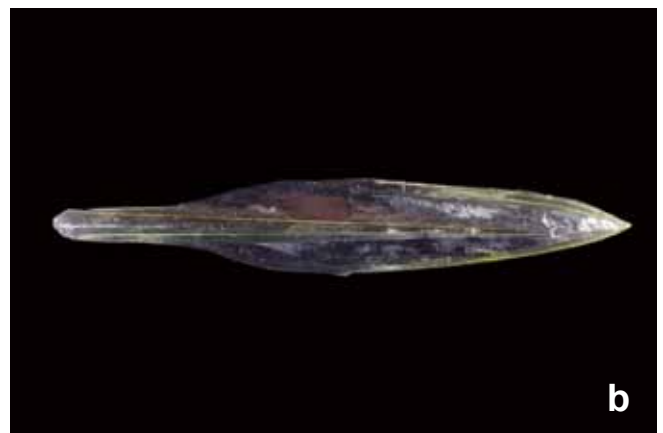
分布 — 北海道南部以南，インド西太平洋海域。山陰海岸を含む日本海沿岸にも広く分布する（山陰沖では初記録）。山陰海岸の浅海域で春先から初夏にかけてアマモ場やガラモ場で産卵が確認される。



a



a



b



b



c

図 4. ヒメイカ科ヒメイカ. a: 背側 (採集地: 兵庫県新温泉町諸寄, 未登録標本). b: 生時 (採集地: 兵庫県新温泉町諸寄, 未登録標本).

図 5-1. ヤリイカ科アオリイカ. a: 背側 (HCA-Mo-577). b: 軟甲. c: 生時 (採集地: 鳥取県岩美町羽尾).

21. ヤリイカ *Loligo (Heterololigo) bleekeri* keferstein, 1866  
(図 5-2a, b, c)

外套長は雌より雄の方が大きくなり、大型個体では 40 cm を超える。外套膜は筒状で細長く、鰭は縦長の菱形で、外套長の 60 % 前後。触腕掌部が近縁種のケンサキイカと比べて細く、小さい。各腕の吸盤の角質環には基部寄りの 1/3 を除いて方形の歯が 8 ~ 10 個並ぶ。触腕掌部の吸盤は等大で 4 列並び、それぞれの吸盤の角質環には 20 ~ 30 個の鋭い歯が間隔をおいて並ぶ。雄の左第 IV 腕が交接腕で、先端部の吸盤が消失し、先端寄りの 1/3 が鶏冠状の肉質隆起に変形する。幅の広い軟甲を有する。肉質は柔らかく美味。

分布 — 北海道以南の日本各地，東シナ海海域。山陰海岸を含む日本海沿岸にも広く分布する。山陰海岸の浅海域では、初夏に外套長が 5 cm 前後の幼若個体が定置網で漁獲され、晩秋から冬季には卵塊が確認される。

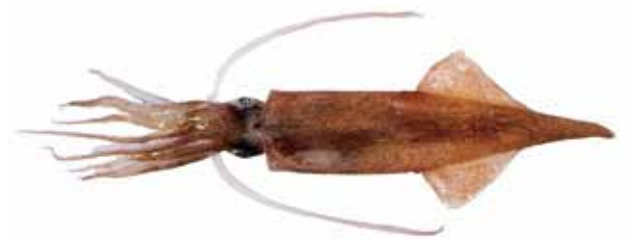
22. ケンサキイカ *Loligo (Photololigo) edulis* Hoyle, 1885  
(図 5-3a, b, c)

外套膜は細長い筒状で、外套長は雌より雄の方が大きくなり、大型個体では 40 cm を超える。鰭は縦長の菱形で、外套長の 70 % 前後に達する。触腕掌部はヤリイカと比べて太く、大きい。各腕の大吸盤の角質環には先端が鈍く尖った歯が 8 ~ 10 個あるが、基部寄りの縁は平滑。触腕掌部の吸盤は 4 列で、その大吸盤は第 III 腕のそれとほぼ等大で、角質環には 30 ~ 40 個の円錐形の鋭い歯が並ぶ。雄の左 IV 腕が交接腕で、先端寄りの 1/2 は鶏冠状の肉質隆起となる。幅の広い軟甲を有する。本種は外套長 1 cm 程の幼若個体であっても、墨汁嚢上の一对の発光器を確認することで、前述のヤリイカや小型のジンドウイカ類と区別できる。肉質は柔らかく美味。

分布 — 房総半島以南，東・南シナ海海域。山陰海岸を含む日本海沿岸にも広く分布する。山陰沖では主に釣りによって漁獲され、資源量が多い（小川・山田 1983；河野 2007b）。初夏から晩秋にかけては外套長 1 ~ 5 cm 前後の幼若個体が定置網で混獲される。山陰での地方名「シロイカ」は、外套長に比べて頭部と腕が太くて大きい「ブドウイカ型（ケンサキイカの季節型）」を指す（夏苺ほか 1986；満潮 2005）。

23. ジンドウイカ *Loliolus (Nipponloligo) japonica*  
(Hoyle, 1885)  
(図 5-4a, b)

外套長が 12 cm 程度で、ヤリイカ科の中では小型種。外套膜は筒状で、鰭は菱形で外套長の約 50 % に達する。ヤリイカやケンサキイカの幼若個体と比べると、本種は腕（特に第 II・III 腕）が太く、大きい吸盤が目立つ。第 III 腕の中央付近の大吸盤には 9 ~ 11 枚の低い半円形の角質環歯がある。触腕掌部の吸盤は 4 列で、中央付近の大吸盤の角質環歯は半円形で 18 ~ 23



a



b

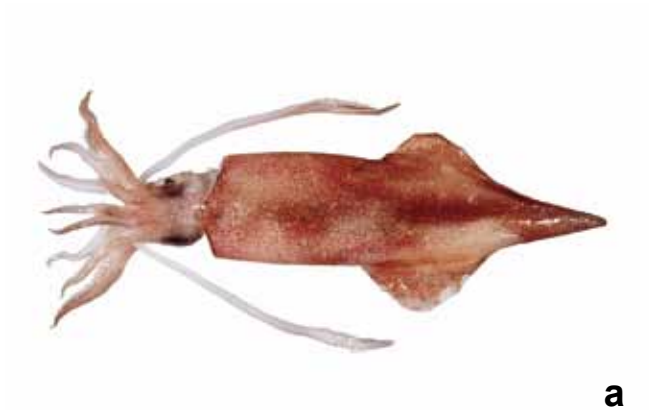


c

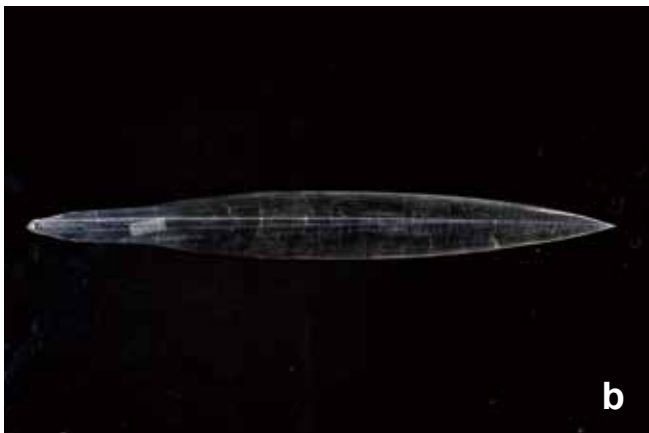
図 5-2. ヤリイカ科ヤリイカ。a: 背側 (HCA-Mo-517). b: 軟甲 (HCA-Mo-835). c: 卵塊 (鳥取県岩美町羽尾, 撮影: 今野仁志).

個並ぶ。雄の左第IV腕は交接腕で、先端寄りの2/3は吸盤を欠き、肉嘴列が保護膜で癒着し合って柵状となる。

分布 — 北海道南部以南の日本各地の沿岸域。山陰海岸を含む日本海沿岸にも広く分布する。山陰沖の浅海域において主に定置網で混獲されるが、比較的小型であるため、市場にはあまり出てこない。



a



b



c

図 5-3. ヤリイカ科ケンサキイカ. a: 背側 (HCA-Mo-583). b: 軟甲. c: 墨汁嚢上に見られる一対の発光器 (TRPM-AMo-0000639).

24. ウイジンドウイカ *Loliolus (Nipponololigo) uyii*  
(Wakiya & Ishikawa, 1921)

(図 5-5)

外套長が 10 cm 程度の小型種。外套膜は筒状で、鰭は菱形で外套長の 60 % 程度。第 III 腕の中央付近の大吸盤には、長さよりも幅の方が広い 3 ~ 6 枚の板状の角質環歯を有する。触腕掌部の吸盤は 4 列で中央の 2 列が大きく、大吸盤の角質環には歯がなくほぼ平滑。



a



b

図 5-4. ヤリイカ科ジンドウイカ. a: 背側 (HCA-Mo-478). b: 軟甲 (HCA-Mo-823).

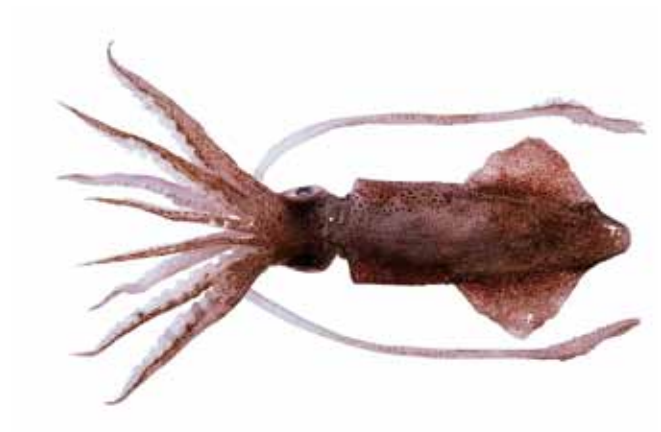


図 5-5. ヤリイカ科ウイジンドウイカ. 背側 (HCA-Mo-840).



分布 — 本州中部以南，日本海側では富山湾以南に生息し，インド・西太平洋海域全体に広く分布する。

#### VI. ホタルイカモドキ科 ENOPLOTEUTHIDAE

##### 25. ホタルイカモドキ *Enoploteuthis chuni* Ishikawa, 1914

(図 6-1)

外套膜は円錐形で，後端は半透明で細く尖る。外套長が 10 cm 程度で，鰭長および鰭幅はともに外套長の 70～75% に達する。外套腹面の微小発光器は 8 列の縦帯状に配列されるが，後方部分ではその配列が不明瞭となる。眼の腹側の発光器は 9 個で，両端の 2 個がやや大きい。頭部および腕外面にも配列された微小発光器が並ぶ。腕の長さは外套長の 50～60% で，基部側には 20～30 個の鉤があり，先端側には 35～50 個の小吸盤が並ぶ。触腕掌部には 2 列 8 個前後の鉤と 4 列の吸盤を有する。雄の右第 IV 腕が交接腕化する。

分布 — 北海道を除く，日本列島周辺海域を中心に，日本海および太平洋から東シナ海にかけて広く分布する。山陰沖では主に 2～4 月に行われるホタルイカ底曳網漁で多く混獲される。

##### 26. ホタルイカ *Watasenia scintillans* (Berry, 1911)

(図 6-2a, b)

外套膜は細長い円錐形で，後端は細く尖る。外套長が 7 cm 程度で，鰭長および鰭幅はそれぞれ外套長の 60～70% と 65～75% に達する。外套膜および頭部腹面の微小発光器は特定の配列を持たず，散在する。眼の腹側にはほぼ等大の発光器が 5 個並ぶ。第 IV 腕の先端には 3 個の球形の大型発光器をもち，先端吸盤を欠く。雄の右第 IV 腕が交接腕で，先端付近に 2 枚の向き合った半月形の膜が発達する。触腕掌部の基部側には 1 列 2 個の鉤と 2～4 個の吸盤があり，先端部

には 4 列の小吸盤が並ぶ。

分布 — 本州以北の日本海および太平洋に広く分布する (由木 1985; 河野 2007a)。日本海側ではオホーツク海にまで北進し，ホタルイカモドキに比べて北寄りに分布する。富山湾沿岸に接岸する産卵群は有名であるが，山陰東部沖には莫大な資源量のホタルイカが存在する。ズワイガニ漁の終期に近い 2 月中旬から 4 月上旬にかけて底曳網漁によって大量に漁獲される。近年の水揚げ量は 2000～3000 トンに達し，ズワイガニに次ぐ底曳網漁の主要な漁獲対象種でもある。漁期の始めには雄も少数混じるが，それ以降は雌のみが漁獲される。

##### 27. タイワンホタルイカ *Abralia multihamata* Sasaki, 1929

(図 6-3a, b, c, d, e)

ホタルイカモドキおよびホタルイカとは異なり，眼の腹側の発光器が 5 個並び，そのうち両端の 2 個が大きく，中央の 3 個の小発光器が間隔を空けて並ぶ。外套膜上には不規則に発光器が散在し，顕著な配列パターンを持たない。触腕は細く，掌部の中央付近には 5 または 6 個の鉤状吸盤が 1 列で並び，先端には 4 列



図 6-1. ホタルイカモドキ科ホタルイカモドキ. 背側 (HCA-Mo-748).



a



図 6-2. ホタルイカモドキ科ホタルイカ. a: 背側 (HCA-Mo-519). b: 漁獲直後の様子 (兵庫県新温泉町沖, 撮影: 宇野政美)

の小吸盤がある。調査標本は2008年11月に山陰東部の定置網で採集された幼若個体（外套長4 cm 前後）のみである。

分布 — 相模湾以南の南日本から南シナ海までに分布する。日本海西部海域においては稚仔のみが採集される（Tsuchiya *et al.* 1991）。

## VII. ヤツデイカ科 OCTOPOTEUTHIDAE

### 28. ヤツデイカ *Octopoteuthis sicula* Rüppell, 1844

(図 7a, b, c, d, e, f)

外套膜は分厚い寒天質状で、後方には多数の皺が寄る。鰭は大きく、その長さは外套長の90%に達する（幅は115%）。外套膜後方の皮下には1対の大きな発光器がある（幼若個体では表皮を通して透けて見える）。頭部も寒天質の表皮で覆われ、漏斗溝の両脇と頸近くに合計3対の発光器がある。触腕を欠き、各腕には2列の鉤状吸盤が並び、成熟雌ではそれぞれ40～60個を数える（成熟雄では30～50個）。腕長式は $2 > 3 > 1 > 4$ で、各腕の先端部分の2～7%は少し膨らんで発光器となる。本研究では *O. sicula* としたが、発光器の配列を含めて共通の形態的特徴を有する別種が他の海域では記録されていることから、分類学的にはさらに精査する必要がある。

分布 — 相模湾と東シナ海から記録されている（日本海では初記録）。山陰沖では水深150～200 mの海底付近からホタルイカ底曳網によって成体および幼若個体が採集されるが、浅海域の定置網では幼若個体のみが混獲される。

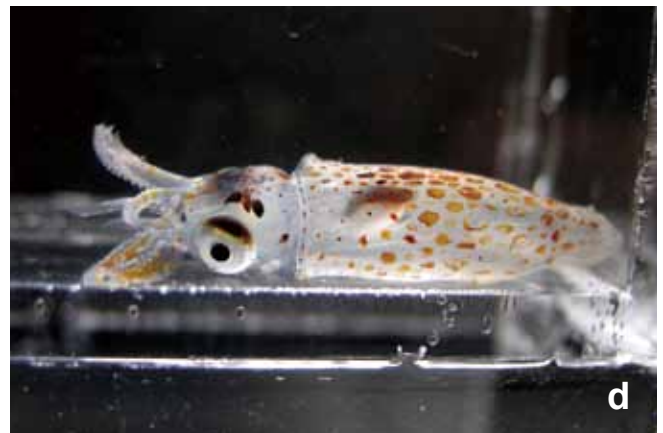


図 6-3. ホタルイカモドキ科台湾ホタルイカ. a: 背側 (TRPM-AMo-0000652). b: 腹側 (TRPM-AMo-0000652). c: 眼の腹側の発光器 (TRPM-AMo-0000652). d: 生時 (TRPM-AMo-0000652). e: 触腕掌部 (TRPM-AMo-0000652).

## VIII. ツメイカ科 ONYCHOTEUTHIDAE

29. カギイカ *Onykia loenbergi* (Ishikawa & Wakiya, 1914)

(図 8a, b)

体形はスルメイカに類似し、外套膜の表面には皺が多く平滑ではない。鰭は菱形で、長さとは幅はともに外套長の 50～55% に達する。腕はほぼ等長で、2列の吸盤の角質環には歯がなく平滑。触腕掌部は幅が広がり、約 25 個の鉤が 2 列で並ぶ。漏斗溝に逆 Y 字型の肉敵があるのが本種の特徴。

分布 — インド・太平洋海域や日本海を含む温帯・

亜熱帯海域に広く分布する（山陰沖では初記録）。山陰沖では浅海域の定置網によって 5 月から 6 月上旬に外套長 10 cm 弱の幼若個体が多く混獲される。

## IX. ダイオウイカ科 ARCHITEUTHIDAE

30. ダイオウイカ *Architeuthis dux* Steenstrup, 1857

(図 9a, b, c, d)

体は極めて大きく、外套長が 2 m に達する超大型種。外套膜はやわらかく、表皮がはがれやすい。鰭は丸味がある縦長で、触腕を含めて腕は長いが弱い。腕の吸

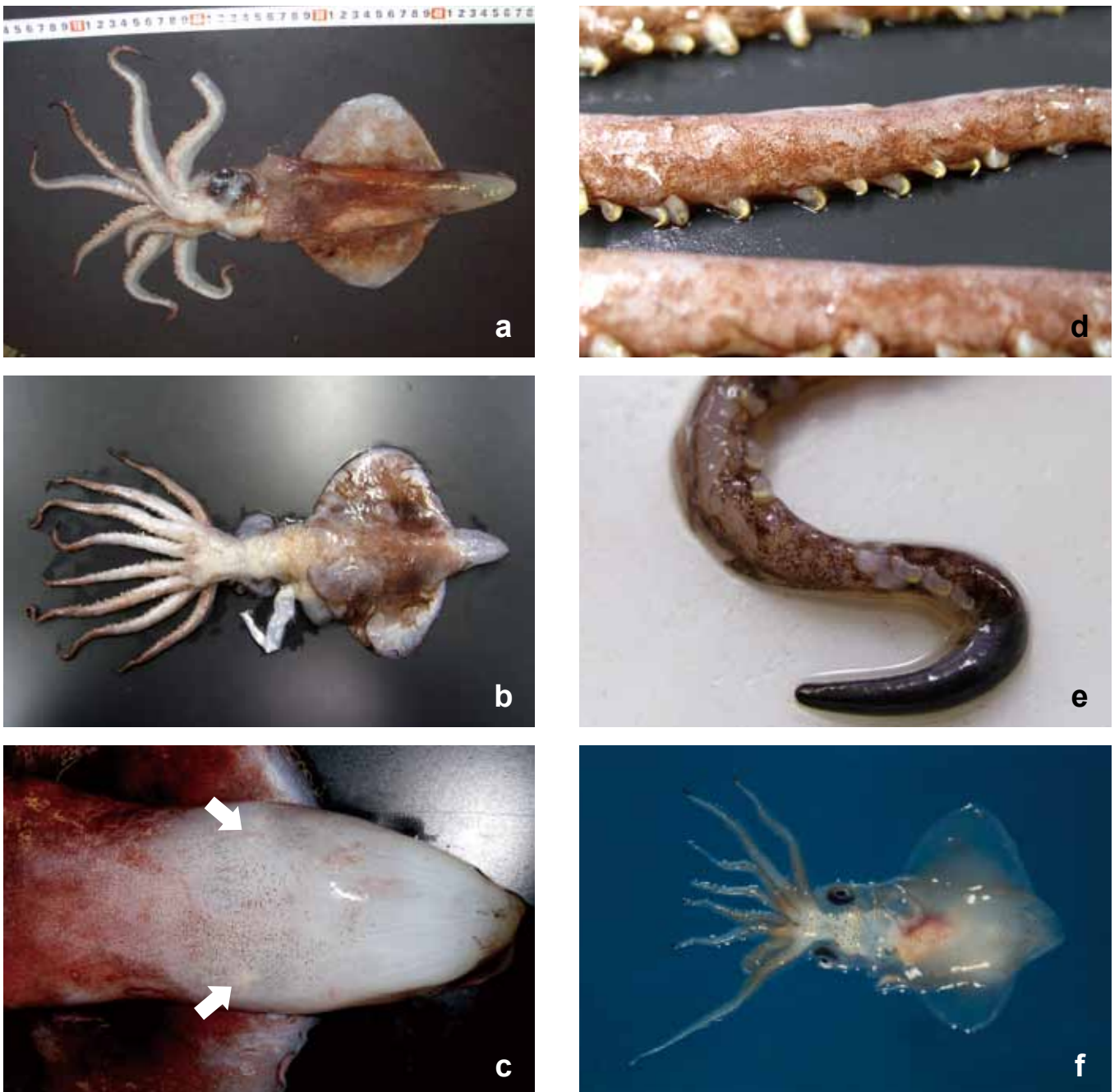


図 7. ヤツデイカ科ヤツデイカ. a: 背側 (成熟♀) (TRPM-AMo-0000656). b: 背側 (成熟♂) (TRPM-AMo-0000658). c: 外套後方の皮下に埋没する一対の発光器 (TRPM-AMo-0000657). d: 鉤状吸盤 (TRPM-AMo-0000657). e: 腕先端部 (TRPM-AMo-0000657). f: 幼若個体 (HCA-Mo-560, 撮影: 宇野明).

盤角質環には三角形の歯が50個以上並ぶ。触腕は比較的細く、掌部の中央から先端までの吸盤は4列で、角質環には細かい歯が並ぶ。触腕掌部の基部寄りには吸盤が密生し、基部固着器の吸盤は柄部まで続く。死後はアンモニア臭がする。

分布 — インド・太平洋海域や日本海を含む温帯・亜熱帯海域に広く分布する。付表および図9c, dで示した3例以外にも、山陰海岸では1996年の3月と12月にそれぞれ鳥取県鳥取市気高町と東伯郡湯梨浜町の海岸に漂着した例が報告されている(窪寺 2001)。

#### X. アカイカ科 OMMASTREPHIDAE

##### 31. スルメイカ *Todarodes pacificus* Steenstrup, 1880

(図10-1a, b, c)

日本で最も普通にみられるイカで、産業上重要種。外套長が30 cmを超える中型種。外套膜は円筒形で、中央部がやや太く、後方では細く尖る。外套膜背側の正中線上に暗色の縦帯がある。ヤリイカ科のイカとは異なり、眼球は透明の膜に覆われずに露出する(開眼垂目の特徴)。漏斗軟骨器の溝がL型である(アカイカ科に共通の特徴)。鰭は幅の広い菱形で、漏斗溝に

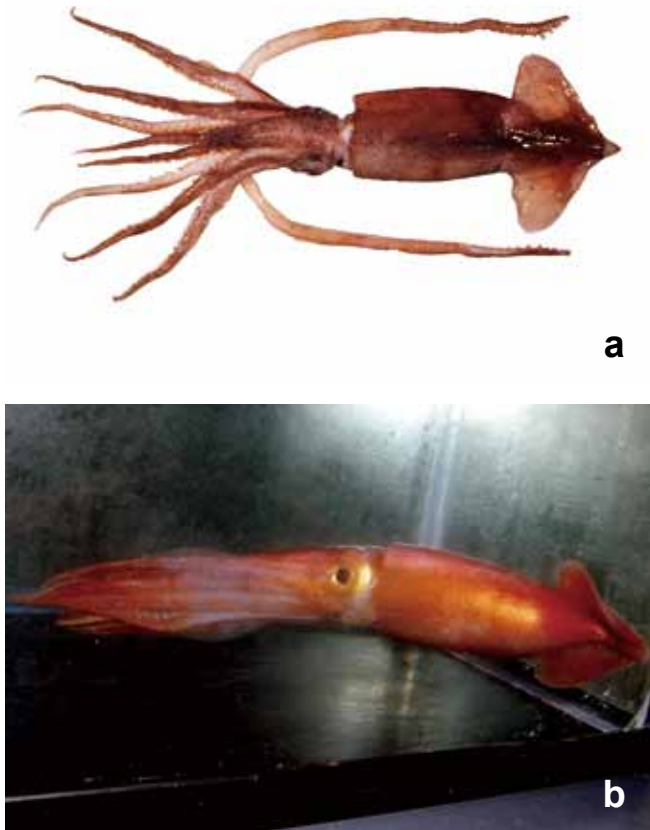


図8. カギイカ科カギイカ. a:背側(HCA-Mo-580). b:生時(TRPM-AMo-0000672).

図9. ダイオウイカ科ダイオウイカ. a:全体(兵庫県新温泉町釜屋, 撮影:宇野明). b:吸盤角質環(HCA-Mo-827). c:腹側・d:内蔵器官(兵庫県新温泉町沖底曳網, 未登録標本(HCA-Mo827の元個体), 撮影:宇野明).